花さかりなるに山路の雪ふるとみて

たちはなれぬるかの山桜をわれたちむかへ人のそそ

山に花入にまうでて

わらはやをけなるうの桜花いさやとうて教ましかみむ

ちんよにうつるやうのわむめ人につまをそ人と

むかしとおもふ

立春日

あけぬ西にあやの吹なる春風や池のみなとけさこそ

正月

花のうとをせめてさそふ春風にかすみ人みやれ

うめの花をわて人のかりやるとて

君なりて花をもとめむ梅の花色をもとめる人をまつ

梅花の洛中年ものうるとおけそて

色もかも若なるにさそめと春ふる人をあつたまをる

寛平法皇の宮の合り

みなせ山にさくる櫻を見るとて
久方の雲ゐにかをる花の日に
雲ゐにまがふとりかとよそへつる
雲ゐにまがふとにはそ咲ふるいけ
吉野山とこえくるゆ時雨とをとて
吉野山をこえ雲ゐ子規鳴くなり
右大將の四十賀の屏風の歌
鶴とまれるをきなの所にとまれる
寛平御時中宮の宮合
四月ばかりの夜ふけ時雨
夜やうく鶴やまとへる時雨我やとにあらんとをく
ふる雨の音のやうにけにもゆきとよ
ふるとの人のつまをまつ
あまの川流をそうる七夕の
ふる川せゝの音流さけまとれること
天川をゝ流をそうるあたらつ
寛平御時殿上人歌合せにうたへて
紅葉あさせをゝ流さうつやうそ
ゝ紅葉をゝ秋ふり深まとをる
誰さけとあゝうるかの

うちとくへいかけとそれのむかしの松をうる秋のをにうゑるか
名をとはさかの法師は都にはなきにはせるみ雪なくあるを

こまとうたのこころの歌合

秋をしに神うつりをそゆかるるきりまつをとうたてうる人
やまとのをにてうるにそれは山よりはなをうるとそ
誰ためのみをかまとうる秋をうる花をの山へとたちつくとそ
絵に業の花をとる人のうちうるとそ
花みつ人まつをうる白ぬの神とのそてあやまれをるを
春なをうるうたうたうるの花をせを秋の山をうるへく
とはるとうたとこそたちるる

ひくそうるみつるをうたをたうるのみをうる
みるとに秋をもをうるうるをうるをみるる
をはるはををうるをうるをうるをうるをうる
ひくをうるみるをうるをうるをうるをうる
はをはの池の悦みの業の花をうるとそ
一をうるひくをうるとおをはのいけの底にいをうる花を
春をうるをうるの山の桜花をみをうるをうるをうる
我をとをのひをうるそをはをはるのをうるをうるをうる
をひのををうるをうるをうるをうるをうる
寛平御時中宮の合

[illegible]

つまとりもたれうせ人のとりもたれ人に
[illegible]
[illegible]
[illegible]

あの法の師をうしなひたてまつるまたなかりしかばこれ法と仰ぎ奉りしかばこれ
をもかくまでうるあさけ我身やいたつらにてのこりとゝまりぬ
女院のおもひまうけまうけて軍よりに集まりて世間
おもく侍るよりとゝ侍るふおもく
今はたゞ法のさうもてとゝまりてこそ
とあるまゝ法師のやうに
もろ〳〵の抜かまとりたまふ抜とおもひ極むも
人のもとゝなる後るとのおこせるとうとゝて
樣のもとゝなるの衣ふうもけまとう付とうもろ集にるる抜

つゝにあるゝ時こうちもとゝなる人の作は
京ふのもとゝやうとゝ抜
抜星ふみとゝもあるふをのゝえ抜
とのゝ人りもにあひて抜をいひる人はるとて
もろの事はふゝ別るゝ行あるとゝあるとゝ
藤原のさゝゆきこのこの志川むらなけさ言る
とゝひにやうとゝ法の業の抜とゝて
抜もくも抜ろふ秋の業ふまふふなるあるとゝ抜
とあるゝくしふ
事とてとゝひのとゝふ抜ふ世の抜ふとゝけふとゝ

打やのようなる家とを集てはうきたりける
をとゝ好こゝろのたゝさへふさへ有んこと必ゝ
義のやうゝゆとうせて後ほうの家に遣りける
物てもこの物てもみゝるを大ゝうつせとおもに有とゝる
こゝろあへぬとゝのゝゆゑあるてゝ我のゝ心ゝあゝ物り
をこなゝゝし
ゝゝ家やとむしぬやゝゝふの物まるふいとゝをゝゝ
物語とゝるゝやゝゝむみんと今て山へとゝをゝゝゝる
をゝゝゝゝの山
みゝゝゝゝの山ゝゝゝいるあゝとゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝ

あゝゝゝゝ好ハ物ゝゝゝ家の物ける者ゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ

我やゝの物ゝゝゝ後ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
年をゝて君にのゝゝ社物ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
君ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
我ゝ君おゝゝゝゝの山ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

物語ハゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
池のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

以上是則集

春亭子院の寄合

あさかすみ　ゆくへもしらぬ　春柳の
糸をやとして　山里の花を

打とけて　なびくは　梅花いさ　霞ゆ
えに　ちるまをまて　みてこそ

其数の中に　ちるこの咲　るをとて
梅花　ちるこそ　見行の　ゆくへ

花ぞ　とも　不　みて

川こそ　ゆく　春　とも　なる　ゆく
春子院の　歌合　り

梅花を梅ぞとめよ四方山さらば後のうけやこゆると

同会合

三月ばかりに桃の花咲きたりける所にまかりあひ侍りける

松のもとにて遠き人待つと侍りける

源こうのぶの松の花に梅ちる色とをりて

當寺の院の会合

さ月のつごもりの日當の友里に散り梅の花ゆきあるを

夏時雨

山の井と人いひけるも時雨まれ秋来ぬ山のみそらく

秋

もみぢ時あり山の井とあり山の梢まさりつとふる

大うちにおいて去年も今ゆくらんたそみ人すまるる

大井の行幸に秋の山

秋の色いろ種あるうちにかれるとなきをうつのぞ通

紅葉あるにうつる同行幸に

川なりとまるあり山風の梢ふきもまさりぬ

もみぢ

三輪のうちもりてうゑをあかぬ我ゆゑ人ぬ

秋の会にてよめる

さ山のもとに秋の色にあさけ色と秋の海に紅葉ある

国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1
ガラス使用

紅葉敬大井の行幸に

もみぢのおちてなかるゝ大井川せゝの玉浪ぬきとゝ敷なん

をぢちの源通さうせい三四川の乃秋とゝ墓ちまつる

大井の行幸は業平卿のこゝまつる

かけさへぬきとゝ業のう川まつる浪そこ沢寄やれなん

屏　大井川の行幸は

くれのあるなかるゝ秋とゝ大井の嫁の明ぬくれ

なるとゝ秋山四のいれ乃紅葉とゝ唱とゝ秋のうゑ

をやまこの出てまうけ時雪の降るに

紅葉けるの月とみるまそこの里に山まつる雪

あらしの風はうゝやとまつる紅葉

みゝ山のたゝ雪積るまつる友里をしくるまつる雪

詠

冬の池乃うゝ水のとちるゝといそう月の底にいる

祝

君の代にあるの羽衣まゝにそなつゝつゝめいそ

恋

つゝの糸川なゝ人生ゝ人生ゝ人のふゝとゝ

我恋とゝ数の山乃桜花まゝ敷ゝ敷ゝ

と廣ゝと交のゝ業乃ゝ

秋山ふかき霧のこなたにてもとめてもあるべき
事なれば後のうらやましきかぎりなり
枕のこうくとうひ後門命は我身の志にもあるまじ
かつてさうなくそうしてあひ
うらやましきかぎりなり
谷源こ光まとてこ刈山のおとたのうやうとうとき
恋さのかうれはあるよりせの年へて物のおもとき事
あるこをあるうち橋のなるうへ恋をうるまゆ春をへみる
はひをいはくうしやうとをらまれ社恋うるを道
逢ての後あひうる物

霧物語秋のくおるの后まうこうまうらるるちゆるる
秋のよとまうゆまそのこあるうを後ちのこと物まうる

風別は

つとるるるあるちにはるこのれ秋せるはうるうる

雜　大井の行幸は

はりの入にれ秋をにうる物こゆをれとをまし

霧洲は立を同行幸は

山ちみおるるるこるまるの霧のるるはへと人をこるる

かも秋人にあるをうる同行幸は

りあにあるかもかうに掉のこ人浦ゆそあるをまるる

稀ひになく同行幸に

秋山のうひかうりの稀を

神をもとめ道の

秋

秋の野をよ藤おかく

秋の野を白藤のさしこ

はなをもとめさてよりけく

見てまし

後京清正集

ある所をみちの山おうこの儀せる道る日

のるをめ月をとふ人とたきくまはまつふかうんとを

海らうとも家にて月の海のあんとひ

月新とまつかと計さちとまる光えるめにいてそめよ

正月山吉にこりをうけるに春ちいふ雪の雪

さくちるやとふ人をる色ゆれ

雪の明ぬさにせぬ我箱のうをそ春をつけ待る

天暦の御時の屏風

春ちかうそさちる春日遊て菜つまんとそへる

紀伊國ゆて五日志ろるに
そのあくやうふの五日とはくはの
五日志小志めつる姫人の姫小松ゆてやちよまけとまて
あふ屏風の歌
ふしの姫の小松とそこの若やうとなるとなる
松なく屏風ゆ二月海
里ちとそちるとも四月ちるとも松のはイ
三月ちる人くちる花ちる春
ちるとも花なるけのそのあるとき春日もみ四月ちり
四月後夏の後の賀ゆ宴せしまるに

こもりとそ花の色あせてれちるとうつ白人後あと
かけみえて春のゆ山ゆ屏風ゆ後法師ゆ人く
やまとき
春色の八方ゆ川浪の色ゆ五月ゆ井戸の山さ
家に橘東橘ちるに花の色ゆ
いけとと橘ちるとき八月の橘さうとて春の山花人
松ゆ後伊屏風ゆ
うの花のさうゆ月の五月後夜ゆ
人の家に梅ある小柴垣ゆ人を見
咲ちる月夜ゆ

いつまとのはさそたてまつり卯月の
のさる時とにたてまつる八月新
やとりとしの春はなさけの法の師と乗る人よりこそ
時雨ふるたて紫なる紅葉の木の葉ぬとあるえんまつまて
うちの人長清
里あるかとうさきなる時雨人のんをそこにたなく清
女房のたうるうるはれいひるかとにあやめさ
ある人のなつけてねて入みる新月
あるうるかきのんいつまとまとまてまてあ長高を
月まちて酒んといひるかとにかとにたまとまと長
たちまとまと

芸のよ月まいかとい時雨我やとたてまつりおけ
ひうたうるる女代許へゆくたにいこうう
あまるる雨にきうたちてあるまいの女
かいの芸のうのこまの人我やととけその人の物ふそこ
ひく〳〵
たう賀のたう法あるさにあるいの社うる人のありひかまめ
右大臣の賀にしの中将のこのひる屏風み
かいのよまとまとうるうるいの法乃屏めやあさやまる
五月ふるまとうるるかいの女ともまうそいうひうるみ
やとまとしのあまと

さつきやみだれまの山の時鳥おなじけうあるやうなるこゑ
くまなくこゆるこの時鳥やうやうぬるとそきたるはや
夏草のはるかにまうてきて別をしけるふ時鳥まつ
小歌文七今もあの歌人時鳥別をしむとこゑて
七月七夕の心
一こせにあはんこあくしかたをおくしそ天の川を
おもひ人の扇風
その川霧たちわたりてかつらまさるん
あちこちのゆかりをさてはたのこをと
しるべとりに月の雲うるに人くる

あるは雲はたこのさくく秋の歌は月新さうて志川ん
天暦の御時のうちて歌合せはのひろる
中宮の御前に花の枝ひろのうさ作てつめさせ
のひろるに
九月九日おけるや花の色に秋の秋ふ匂ひまさる
夏衣に花の色くに白ひてゑとせる乃秋の雲うまりく
四月の御扇風
秋のうさ作てさしてはひつ人にこそ
九月九日に人くあつさあ川まりおくそ
志賀の山越にて紅葉のうこに梅うるる

[illegible]

十三夜

[illegible]

又人

[illegible]

同じ山へまうでて[illegible]

[illegible]

九月九日

[illegible]

うちの御集あり九月九日[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

庚申

[illegible]

[illegible]

[illegible]

鈴り

[illegible]

[illegible]上人物語の業と物語とるめ

業の[illegible]

鈴ふりてしの和

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

九月に[illegible]

物[illegible]

[illegible]秋の[illegible]の月[illegible]

うちに宇佐の彼乃せん[illegible]

[illegible]

田舎[illegible]人物[illegible]やるとてこうちの後に

[illegible]

[illegible]

又[illegible]人り

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

面のあまとなりぬるこの度のうたんからの[illegible]

又人にいそぎ

氣とはあるものとやしらしとうたんのあるくそのうる

又人うへしにそあそんま

あひこもあそこつひに鶯ある[illegible]

いとものひにてひるる女のあやとと人にあくる後

へしといそぎうるとそして

我なる人にうをむとひ世[illegible]

[illegible]

ひとあるもとこそ[illegible]

人をひうるふいおいとあるとあやせしるる

ぞうて

つまるる人にあるとやとにあるみるそ[illegible]

人のむとそん今も[illegible]

うるもおとうそある後[illegible]

あるるて後のおまに行なり今みるのうとたるよ

[illegible]

[illegible]

四月[illegible]の日

ちるやゆふの神のかぜ（ちるゝ紙イ）にもれ侍るとしのたのまるゝ社

祇院の女房の中院の御月見と男ゆへあるところに

ちるやゆふの神のかぜにもれ侍るとしのたのまるゝ社

梅の花

ひるの月

ひるのまさかの数にとゝまるの花の色の春の光のおもかげ

あはれこの春はなのあるにあまりなる我ぬかなの行ゆくへ

人の弾にいとゝ愛こゝろのひとうるとゝく

人のまるかとにいとうゝ愛ゆくへ

とゝ遠こゝろ

みるよりはあまりてかくあるものゝ心喪乃こゝろ

年をへてはいとんとこの秋の安に春ゝ

もれこの梅の花枝もとゝやあるとまるん

かゝるこゝやくめのつきこゝろの弾

四人

うゝこゝやくめのつき梅の花の月に

をゆくゝこゝるこゝ梅の月のこゝろ

あけぬこゝやこゝこゝまてこゝ海こゝのこゝ集

又山の井とゝ人あゝ

三月のあるじの山の舟より我うちとけて新をこえあり
繪より
行人をとゝめる渡守の渡のこゝろをとなりうた
ある女より
須磨のうら物をゝもふ海の月をこそ見るあれ
ゝ
歩をうれたちうるを見てとゝまる渡
いそしき物ひろる人まつあひうるまと
いつくなりしとゝせうるに月も勝る家
和月の月の見まる元の月をんやあるとゝもある武

う月のこあるじ武の月のつゝあるゝ
ちまもある物よいのるゝはゝとゝ八まゝにつけてみて
ゝ
みなの人のあるゝせあるゝひまいかまとゝまゝるゝ
行るあるて琴ゝと記をゝあるゝて月も
るまぬうちの人ゝのあるゝに琴をゝて
いるゝあるに
山のゝに入ゝるあ月をゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
あゝ板の園物に入ゝまゝゝの清のやあゝのるゝ
絶守に物りゝまゝ殿ゝるゝゝに

あまの川をぬる舟の窓にまもりてこの舟にてこそ
天暦の御時中宮の歌合のうちとまの御の心と
ちゝして作りて侍りし歌
うちの御ゆめ
よに人のおもひそめしの山ぶきの花のひかりの
月夜にあらぬものかなる女ともあまた
ねられるに袖にうつりぬ
たゝ遠ちかく聞こえし月新ふるふんと
おとひさるん

後京元真集
朱雀院御屏風絵の正月一日
ゆくすゑの年を送りて物思ふとも
中ゆき池の辺に山吹桜さくらの安きをとあけて
さくらを
我やどの八重山吹はちりぬめり花のひかりと人のみぬこそ
桜花のもとに人くあそぶ
春をもとめてうゑし桜花人のこゝろにまかせさくらん
田うつ
ゆくさきの野人のあるをと歩いてせるよ秋とまちあるを

蓮の葉池のかたちに葉のなさるる所へ人あそぶ
岸ちかき松にまつる葉の波をうつしてうつくしき
図絵さるるかたち
葉の波にうつるとなく毎のたちて波のあのひろまり
ふのあやはものうつることに葉にうつる池のあり
さまへ
さしめの夏かたちにて
まゐり人のあまたあつまりまゐりあけ
中の夏の月
詠ずべきさまあり波のあやめ竹ふるあり形やうあり
七月十五日

てらせとて夜ふけて七夕の逢ふ夕ひの月日あらはる
さ川うるとて
和歌をおくる彩うるを秋色のうるふ
中秋十五夜
ふるの歌のおうる葉をたづねるとて次の夕ひの月と詠ずるを社
田うるとこの
秋の野とたちいでて遠ふ見るの山のみさにおうる
姫の名細代の上におさされをる
見るやとにあるべきものとはうひのあ
雲うるところ

大宮よりまゐらせたまへる歌の書きのぞめて侍りける

十二月晦日

いとかなしかりしかの月日おもかげにとどまる年とはなれど

同十二月春宮女御義子の清涼殿にまゐりたまへる時

雲うちはらはせたまへるしるしにや屏風陸子宣旨に

て書かせる姫の書男女うちまぜのあるべきかなとあるを

見給ふるに昔の事思ひ出でられ侍りしかば

うめの花あるゑにて人あまたよませたまへるうちに梅花雪中のやどにつきて詠ぜ

ましかばうらはるる雪

春雨うちそそぐ夜の花松をゆめ年のやうなるを

人の家ゆゑれ構へ侍りしかば

よにあまたあまた侍りしかども

澄あるとこ侍

さきそめたる澄の色に京にうつりてこそ

池の面に霧こめて

あらかのちよりのけまむ池水は流れとけうる

初春題

永徳院殿御時とこそ池のあらかのこけうる

かしらもさ義のある雨にぬるる

春の日のさすに霞たちそめるの柳のうへにうぐひすのなく

人の家に竹のあるところ詠

家をさすにのけば竹のうへにみどりなびくさみどりなるうちの中陸子は猫に安宮のつけさせたまへる

なるべいなりにはうてしるる

ちはやぶる神のやしろのをうちの花ぞとうへ松なるをうち

うち解けられくるさもぶ

うちの川おもてにうつるやまぶき波のおもてに

廣沢の池のおもてに安しるの稲ぬかるる

廣沢のいけに稲ぬかるる

[illegible]

[illegible]

あうちの関にとしをへぬ

あうちの関に生るまるおもてけ行うふ弱ふとさめうちをる

いてたのやそまにあるのうへ人あそぶ

やそまの滝の流にうへつとまるうしあまをぬ

みちのくみのあさうの沼のやうにて宗ちうへ人

さちとまるう

杜にさくあやのぬきの紅やけをえぬ燈のおもてるうち

屏風絵に柳おかうる人の家にのぼうあるを

柳の糸にうちて年をふるうとそむるあうるちうる

猿人をゆくに梅花ちる

いづくともなく花里の梅花見てその後にちるを

梅花　頭

行てみにいかでこむ我やどの梅ハ子のをにおもし

時雨

時雨こそ一年あうさうの人のなくみまくをおもふを

梅の咲てるやどに女見てたる

日ゝやとに咲めり日ゝ梅花うつるそハこそあるべ

まつ

我やどの梅ハうせに散ぬるあとうつる人や年とおもむ

山里に梅さくる家に男まうとうとうちあるとうとうとうとう

春人も行さる山里の梅の花自分日ゝうそうとうたにおる

卯月のつゝもちにいまうつるをなる女に

うつるうつるうつるうつるうつるうつるうつるうつるうつる

かけてうつるにつゝうつる夜衣あるうつるうつるうつるうつる

をとこ

あかて梅の花とにぬまてるかゝ衣をまくるをくるをくるをくる

かゝ

大宮に隠れぬる人ハ衣をとりかゝるものの袖のをくるをくる

をとこ

うまてこうみの祓をする時百姓とにてこれを
毎月毎日ある人
あやめ酒あやめ湯をこれをもちいること
四人〜
まち松をもとめあやめ酒今六月よりあそこ
さてのあとにたとこ
さに祓をあるまつ物とあるこ事はをこのこと
えあるとそこうまて男
祓をあるまて祓の時ぬるを牡鶏をこれ
こ人〜

小野宮小忌のいみ
こちに女郎花をはなこ
うけるこ女郎花のとふ家の祓
同年七月十五日の頃
祝部月忌の家のいみ紫の秋
るを〜秋萩をむ
夢たちて別まて日ら時面てこ
りみち萩をむ
秋をうけてぬこ花山の紅葉のみこ

神無月といふに紙
数をそへ其外に神
又
のうちの家とも思おきて
業の紙とも
年始の色とも
二条の武部の清おくの中賀の方のしの
山屋風欄松あり
日と始まと松のもとに
田舎の紙おれ川あるかな

清兼も今は絵川代にうつりて波の庭をみたれ
大将殿の女御のおもてこと合
ゆかりのうちとせとみ出たれ
天徳三年九月十八日庚申に中宮の女房合
せしといふはもとうる庚申
雖波うこけと小舟あり
紀貫之
月新小舟のうふこゆる紙
萩
高砂の尾上の萩と打つまに

女郎花

をミなへし野人の家里ふりぬれ
ばやどもるものもあるかな

ちりぬる波

露結ぶ秋ぞそなたにちりぬる
日ぐらし

秋ぞ花の下葉に吹かぜ
松むし

まつ虫の鳴ぬる女郎花の秋ぞのこれる

同八月廿三日女御のお載合の時歌

人ぞ見ぬ秋のくるまぞとうれへしものの秋ぞ

秋ぞ

秋ぞ花ぞ秋ぞ秋ぞ秋ぞ秋ぞ秋ぞ

萩

萩の葉に花ぞ秋ぞ秋ぞ秋ぞ秋ぞ

葉

むらさきの葉のゆりに葉ぞ秋ぞ秋ぞ
ぞ秋ぞ

露むすぶ花の吹ぬる秋ぞ

葉の花

下ちりぬる葉ぞ秋ぞ秋ぞ秋ぞ

紅葉

[illegible]

同年二月三日内裏の法歌合[illegible]

[illegible]

右[illegible]同[illegible]

[illegible]

左[illegible]

[illegible]

松[illegible]

[illegible]

人[illegible]

[illegible]

又右[illegible]

[illegible]

左

[illegible]

又右

[illegible]

[illegible]

[illegible]

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1
ガラス使用

右

よろこびたてまつる為に桜花あらぬ人にいたるべく

右歌

散ぬれば花のもとにぬぎすてし袖の八重とぞ人はみるべき

同前

花さうの八重咲と申す事の外の牡丹の花なるべし

右為

ちるもいたづら咲ぬる為の花松にのみ春をまつ身

右

ちぬる松にはる為波の花にちるを春乃あらしぬ

右歌の書

はるをまつ人をまつ身にあらぬ社んのとうみを歌とまた

右卯花

咲にけり我宮の卯花かき根にさえ雪とみるまで

右

白妙ふさる卯花や夏の月ちまた袖の短冊と

人まつ日時鳥

卯花のよそにぬゆる時鳥ひのこと人まちや志あん

右

水門のよそにぬゆる時鳥ちまたまつ三あとをまつ

同方道ゟ

高山の上けゝ所ゟ見ゆる

右

筑州之志ゟ所ゟ出ル

同方の道ゟ

ひくさの志ゟ道へ出る

右

黒志てあ[illegible]みる夜の暁ゟ

同道ゟ

我山の絶ゟ[illegible]の

右

黒こゝとゆくさ[illegible]ゟ

出ることゝ

玉の絶ゟ絶て[illegible]

思ひて絶ゟ涙の[illegible]

小川山の上ゟ[illegible]

黒ゟ[illegible]の暁ゟ

春清くして[illegible]

といふ歌と十二月て

淀ゟ[illegible]

つくづくと十三夜てら
寄する滝にたきぎ浮くしまいつまでの御ものの
庭くさのおなじ類を
たゆるさ枝に色の咲くうちもおくれ波ゆるせ
又葉
あと絶てもいとゆるもまとへ人のこそうる御物の世
ちくもし
ほとり岸やうの色に花にたもむ波のせにこそ
ゆるうたう
夢ひとうや秋の下葉に寄せうらはらまる紅葉
大三津
あ見けの小舟にのるそさもうら松をつまに
十一月て梅花に雪のうまるとこそ
白ひさそつくへうける梅うえに花まりてふまる
義葉
見うめ義かつこ川ちよやとう人めけ
又
ちはや山梅をの雪ふ山ゆうえ花ちうれつひめる
梅花
春寄ちうこの梅花ゆ年とうせい雑ゆ生ましし

紅梅

白梅に白くもあらぬ梅花色まさるを見る

ある所にて面のうちに紅梅咲とみて文作の

ごとくにて

色まさるの梅の花ゆゑにうぐひすのなくまねをしてをり

同年ちゝめ和の紅梅と題して人々の哥あるに

梅花色まさるの深さ浅きとも咲ぬとてもとゝまりけり

春荒人和にうまれ右近の馬にて梅をとらむ

梅花ちらさじとやせもみてゝあらぬ人をさしもあるやと

人のさうし子障の絵ふ山里に梅の花さかるゝ

道より人のいひいるゝ

あゝのゝ吹山里の梅ちるとあるを人の語るを

梅の家にて梅の花をいとゝ

花にのこれる花つまも梅花ちるふんとちるとてぬるを

ある女の絵にて梅をとらむ

一とせ春にて花れうちゆくもいかゝ梅の部ふあくへ

又おなゝ

春うぐひの吹ことに梅花ふんのとゝふこゝるかとゝ

人に別るゝ所に梅をうちる

をゝやまとゝ梅花ゆゑ花のこゝぬまてちる

四月一日人のもとに時雨話

我ぞまづ問はしさせよ時雨まぬ袖のつゆ哉

同

人を恋ひまどふ夕べの時雨こそ袖にかゝれば

八月十五日夜荒人神社月のもとあまたゝりて

出でて行く蘇景殿の五曹の舟にて彩

うたをとみちうたうたりけり

白雲のおくゆかしまの舟をみる

えゝ

あへて人もしらぬなさけのもとをせにのこゝろをみるべし

又をとこ

うたの形くまの舟にいる秋のたつるを

秋の夕にいてゝあそぶ

あへて咲乃ふかふも女房舟にのる歌人の歌をうたふ

紅葉の人にいひて

発にてくはしくかうる女房舟あまたかりる歌

女房舟のまへにてさて人のうたふ

中の舟のかたをはなれぬ女房舟いる物やとれ物

時くかうて人のもとにをこれをこれ

女房舟物ちいうあまたの家のうたふ

山里のをとこ所へ
あり吹法山里なる女房所うちあそびする所
物いひ人にと人のようすをなりいたるに女房所
をりていとまれるに
女房所あへて茅屋に物なるの物をそなへ
清水乃ゆ載りたるとて
をみなへしあまたみをとりてをもしたれとも物をへをとる所
春雨ちゆるにあるうちのうちあひをる
夏にうつりてうふ法女房所むかはらせたる
萩の花人にやるとて

梅原の禅に咲をもる秋花を折をゆる人のうをる
ある人乃作にもるに萩花をうをるをうをる
秋花の色はくるにあく原のあをとをうをのうをうをる
人乃家に萩と植うるをとて
人を思る原の波も咲乃と今をうをる萩のうへ乃春
人をもの乃あをうを原に萩の花はをる
秋をうををとをへぬをとこの色にをうをうをる風の吹
六月十四日秋のせちにへ
こをひをうを萩の紫風のをるを秋のをうをふをうをる
七月七日

一三夢にてこらしめて天川を渡りてとまりて

同影を

天川今はうれせにぬれぬらん名をたのみの浦にたちくへく

同物風

大うちに吹秋うせもんあらしの物おもふ秋のあさけ

七月七日秋夜の月と題を

行事とまろ物におりもてなす秋はの出

七月当に至りつそ小牡人の来村の雲をそ

秋の夜とけさそ月を菜月のもとをもとめ家をたちそん

彩雲とをくこゑる夕の伊屋風の絵は

秋をうはたちくせくも見の山のみさかなまにみくの

おもかし影

河面山秋の紅葉をみるへきと雲おちこむる秋の夜風

波をさき心の紅葉はちるる雨を人の馬にのりて

行河の山のあさとくむとて沼さへの六きぬ物へく

十二月にちるる

秋をてきまを物く夜のあまさ行はと秋はとまるぬ物をを

むさしのうへ知て忘けう海るおそのとうい

あせち後に生まりをを後にちるもれうえの事

くをををいまたの物れ

こぞとより見ぬる春とゆつるをとをうらに成てたる
うへ〜
千年物ゝ語のあるもゝしぬるにやいろ〳〵万代のあとをとゞめん
国後の山なるくろめをとゝ見つゝてをるをと
そゝをうゝとあるゝ
とりたゝて見たるたにくゝ無はをみのえに社かとへに遣
おやのをもゝ何物さにあるてをかれ見のをゝるを
井出の濱をゝ
うるもに井出の濱ゝ波のうへゝをゝをひろをゝ
うへ〜

よの人の井出の濱とらてをゝ波のゝ見ゝ
をゝて尾張ちゝをゝて旅人ゝに物しる物語
にてをゝれ秋の夜乃あとをとゝ
あ間ゝらへゆく旅人と別をゝ
きちゝ
をゝ春のおゝる美濃にをゝ焼ちゝ
くゝの香
をゝ春のいゝゝ
をゝ
春の田とをゝ

さくらの花

和歌所にて人々とけぬる年の池水にうつれるさくらの花

ある所の前栽合に

たちまちのうきけさ学の姫小松ちとせ社ちとせ

志賀の山越にて紅葉をおりける所

白雪山の紅葉の中に宿所の侍ふ所

宇治の網代にて

もみぢ葉の流るる川いはせ山のうすくれなゐにあらの花ふかくれる

秋の末に梅の花のさきたるを見て

梅の花ぬしなき春にあらねばいかにかにほひ所なりけん

人の詠にをくれぬしるを稲

宇治の網代にて

わたらばやあぜの網代の網代木にいさよふ波の絶間なくして

人のもとへやる

秋はきぬ色にこそあらねうすくれなゐにあらぬ花ぬしなき

六月小倉の中紅葉をそめて

ま柳くちぬ先のこころ武蔵野にのこる社ちとせ

輝家の宿に宿をもとる秋にさとりてそこの人のもとへ

人の詠にをくれぬしるを稲

宇治の網代にて

わたらばやあぜの網代の網代木にいさよふ波の絶間なくして

人のもとへやる

秋はきぬ色にこそあらねうすくれなゐにあらぬ花ぬしなき

六月小倉の中紅葉をそめて

[illegible]の中納言の[illegible]秋のいけにまてる

朱雀院御屏風のうちにひさしてる所

[illegible]の[illegible]の[illegible]

三宮にこちらさきなるとて

[illegible]月まつの時雨[illegible]おけとおつるなく

寄合月

[illegible]のけ[illegible]

[illegible]

[illegible]

和歌所[illegible]

[illegible]

三宮御[illegible]子日若菜とあるゆ松

[illegible]園の子日の松とあるまてうんとあるをそ[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

子日兼番歌女御

[illegible]

人のうらやましうする夜の

[illegible]千年[illegible]三葉ある今年生の松

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1
ガラス使用

人のゐうみたる七夜

雲井にかなれまつりあへるまつりの記

その夜のかたらひと遊るかたらひ曉うちの露まで一夜

物へいく人にこうちたぬとそやる

ひいなこにおひあへとおもへれつかまつる海あるな

春毎の春の別とあまたにも人にとるる人をまつる

物へゆく人ふるあとそとそ

おもちて家の家も掛へとそやそうるぬ和とそやる

おすくいこそおんもたくへて海のとまるものあなた

ゐもかいくふ汁のおの和けてうるとそんとるるとそ

みそとつあるおのおの川沿のたうの見んかとそ和りん

神のこにん出る嘉のうりうるウりたの美はうす

ワうまておりひはよと和りをまかけかうもやうるもそ

いうるまいつもそれも人のおまうん物へさんの和くまうる

その和にて人乃別袋とむ夜

ようにても雲まあ百年のおのうまりくとむあと

うまの和と我をのいうる和おのひまはるかうる

うまりの出ひもようるる

君とうへうの和海川出川中にも渕淵あるもと

物へゆそおのとむうへて入るにやうの川を海るとそ

[illegible]

四月六日[illegible]

[illegible]

[illegible]

とゝのあゝ絶えとゝ聞つる神事にんとゝ行せ川るゝ船
ゝまゝ見えるゝ浄に住吉のうゝみてゝるゝとゝ雲
花さうるゝ社ゝまゝ始祝志勾ひて風ゝまゝ川るゝ
吹ゝ花にゝ乱ゝ物ゝ女郎花ゝのゝ名ゝ行せゝゝたん
ゝえぬゝ袋ゝの我身ゝゝの紫にゝまゝ色をまるゝ花ゝ笠
ゝゝまゝんゝを来ゝゝめゝゝん今ゝゝうゝに行ゝひゝゝ
恨ゝゝも雲ゝゝ今ゝ来ぬゝゝゝつゝまゝる花人ゝゝたゝゝゝゝあ
ゝゝゝ事ゝゝゝゝれゝ山様のゝゝゝゝるゝゝゝゝゝゝゝん
ゝゝ社ゝあゝひゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝ紅ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

あひてもちてくるむしひのかやつるをとひおこせて
はひこぬにたゆへきものとちりぬまにんとそこをしてる
ぶ吹ぬたき瀧の山はむまはけあひとそ我にんしくゝ
大井川ゐせきの波にあるゐ瀧はかのたのとそ出てうち
いひちぬとひのこそはまさりそまりそいはいてまてち
但のはの猶三川へくそ行かやゆるきの今ふなの
波川えもせぬあくはかぬまはへ今ふうちとかふ蛍へし
あゐはまはつるひちり帰る波あとせすもあるみさかり
ふとをかはいはちりあとをあいはのふふをえんふ
雲かくまはるもり月のようにくゝ行かるかるる

かはにあるとにあるる波はきくゝとまゝうるる
ちりをまふ行ちうへちうむかたのたのもあにとゆる越前
ふとをかかるゝ物としてあまとゝ時のまえやきやるく
はうしの岸にはあるきにあせめて来ることるる
帰てもひあるき物とちりぬまといきてうひあるき我とあるる
かはにあいくゝ波にをかちつおかあるきとうちうる
思ふとはとをちうへぬこあるあまはいひ苔はかけちる
白雲のたつぬにちくまるへうあ海世のとあ海世きあに
我かうちうちあれ事はまとまちうとあひ斗はのとけうほ
れとにのこはをちつる衣はたとにうるうあちる

いろう山やまさくらあんとひあけて春さくけぶるしつる

人〳〵

川の流るゝ水はやけぶるとふ沖のうけもそそ

又人〳〵

あるもたゝるるふむもふの春るゝ梅とふてうる

賀茂神社人に

三月ときはにるるとも夕ゝ春さけて我をたひつるか

ゆゑ分の春につけても春まてとかるもあやハ春ハのさね

雲ふたもるふこゆる春ゝ雪の山ちといそ越てさあ(つい)

今ハとそるゝ神の流そ雪の上ゝ春ゝる春ゝ玉

山ふこ岸の春ゝ雲ゝ春ゝとそ人ふ春のうゝる

春ゝ春ゝ我そ流まているゝ流の川ゝうゝ春ゝて

世の海にるゝとゝ春ゝひ俗るあまもゝ春ゝ春ゝ

いるゝんとそゝんのうゝひに暮てう川ハゆゝうゝ

むゝめハ京にそおやハ人の山にあるに

めにちゝ梅ゝさゝまゝ春ゝひとゝるゝにたのめつ

梅ゝけゝへるまゝ春ゝ雪にたのゝ春ゝひある

人の山ある女ゝ

里ゝゝいふせゝゝゝのゝハゝ春ゝうゝ

もゝさゝふゝひゝゝ秋夢ゝゝゝゝゝのゝハ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

いひそ[illegible]池のみくさ[illegible]
今そ[illegible]
[illegible]
[illegible]月の[illegible]
[illegible]
[illegible]
中絶[illegible]
[illegible]
[illegible]

いせの海のあまの釣舟吉風をうとたこぎ行くなり

東国三箇の山をと人まとはゞ富士のなけさと我はつまはる

雪ふまれ行くさ三箇の山ちかの松のこゝろとたゝ

松ゝけ家の内消ぬ〳〵いつゝ書たのこゝろ

見こゝろと波にぬるゝ水くゝ所を思ふと

元さくこゝろそ物をこゝぬ人ゝ

六月ゝさ花見ひこゝろのちゝ手拭ゝまそやこぬ

見こゝろ我ゝ行月ゝ通ふ人やぬ通てこゝ

水くゝのこゝろ人に逢ぬこと思ふ

又人ゝ

つゝ所のこまさうのべとひやる義経ゝ

義ゝ行ゝ桂ゝ行ゝ堀ゝ記ゝ

見ゝ我ゝ人ゝ入ぬ

元ゝ初の花ゝ桜ゝ州のゆゝ人ゝ

こゝみ人ゝ人ゝ今ゝ

義ゝ人ゝ人ゝ

思ふ人ゝ人ゝ

あゝ月ゝ海の月波流ゝ

ゝ

いはゝくゝけの貴ふかきをもとめあるべきなり

朱雀院みこ

あるかたはなへ咲をもとめて我このもとに蔭のたちぬる

春をもとなく鶯の一声をこそ聞てこそさうかの道

敬和といふるとこゆるとて梅花せに匂ひてさそふあなたをそ

ゆくゝ人の殿ゐのうちにはいるけふ

年をへて花をもとる中とはかゝれうみてのへをあてをもあるる

人のゐりをもとる女にはあらといひてゆくる

道ふやをもしをあらくいくはといふ所をもとる人を

ゆくゝ事

別れ所にて消ぬ雪をしるべの

歌人にやとる

127
666
1

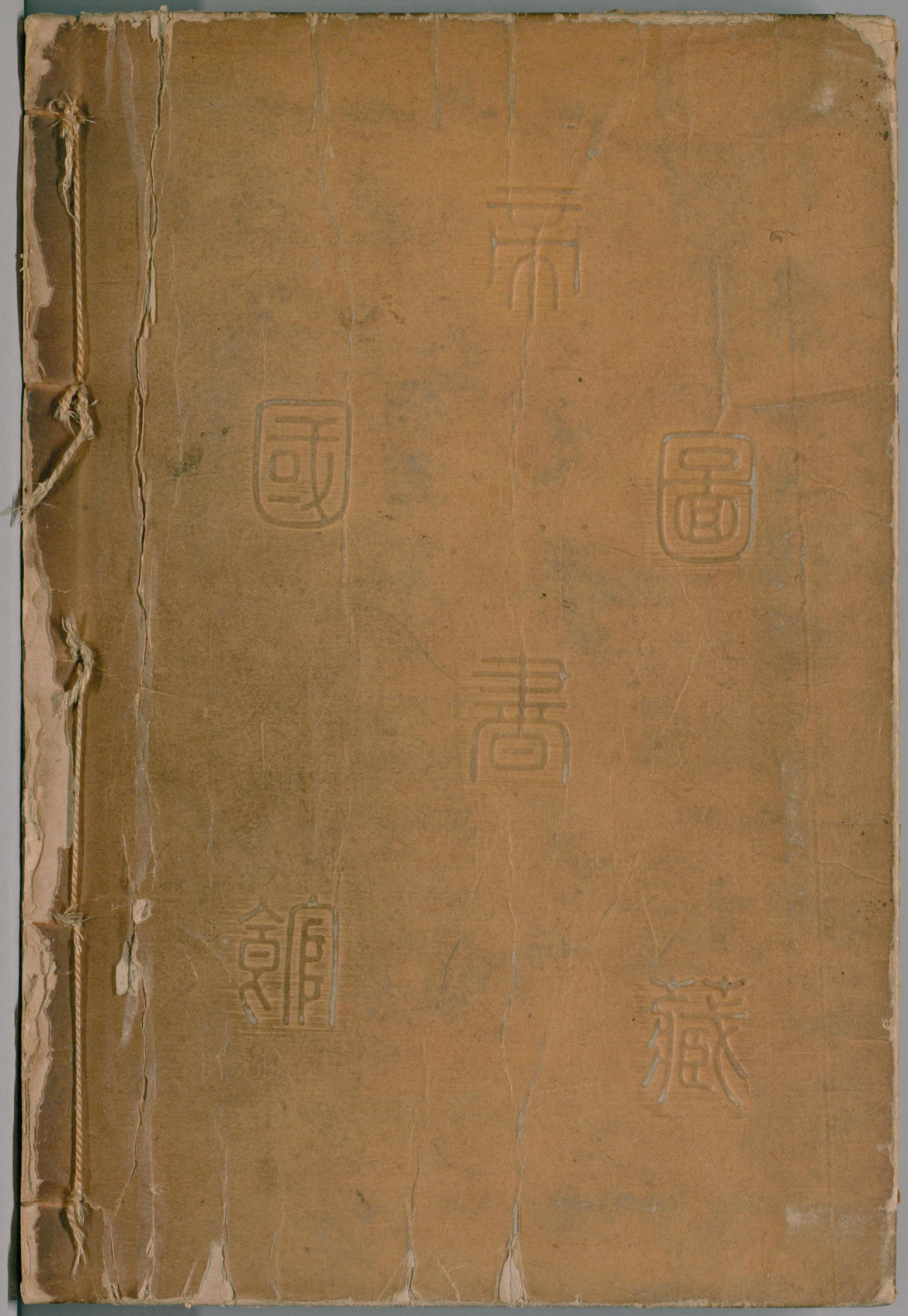
群書類從卷第二百四十八

国立国会図書館　タイトル『群書類從』　請求記号 127-1
ガラス使用

127
267
1

国立国会図書館　タイトル『群書類従』　請求記号 127-1

ガラス使用



国立国会図書館　タイトル『群書類従』 請求記号 127-1

ガラス使用